

# 史料館報

第 65 号  
平成 8 年 8 月

## 『史料館収蔵史料総覧』を手にして

青山英幸  
(北海道立文書館  
文書専門員)

### 一 はじめに

五月下旬、筆者は突然『史料館報』の編集子から電話で、国文学研究資料館史料館が編集した『史料館収蔵史料総覧』（一九九六年三月、名著出版）の「書評」を依頼された。本書を出版直後に手にし、その折、今までの日本の文書館、史料館等で企画されたことのない本格的な記録史料ガイドブックであるとの印象を持っており、機会があれば吟味したいと考えていた矢先であった。それで「書評」を引き受けたのである。しかし、キーボードに向かう前に考え込んでしまった。本書は記録史料目録のひとつであり、それを「書評」するとは如何なることであるか、と。つまり、何を書けばよいのか。

そもそも記録史料目録を書評する

行為は何のためであるか。書評とは、一般に、それぞれの学問分野においてその研究が到達した世界を関係者と不特定多数の読者が共有し、さらに今後の方向を探ることを目的としていると、筆者は了解している。それと同じことを記録史料目録を題材としてなしうるのであるうか。

かつて、原島陽一氏が「史料目録のうつつり変わり」の論稿で、史料目録の書評を今後積極的に行うべきであると提言していた（『アーキビスト』二二号、一九九〇年二月）。それによると、それまでは若干その種の書評がなされていたが、それらの大半は「収蔵史料の内容評価などに重点がおかれ」ていたとし、「目録の様式や目録事項の可否などを論じたものは少ない」と指摘している。九〇年以降の動向を筆者は十全に把

### 目次

『史料館収蔵史料総覧』を手にして	青山英幸(1)
古代・中世寺院史料の活用	永村 真(5)
史料の保存・利用と電子化	蔵持重裕(6)
特別展示・講演会	(7)
史料修復研究成果報告	(8)
史科学の研究会報告	(9)
史料管理学体系化の準備研究会 受贈図書	(10)
史料管理学研究会カリキュラム 集報	(11)
	(13)
	(14)

握していないが、全史料協機誌「記録と史料」を通観してみると、その動きは徐々に現れている。しかし、記録史料目録書評の基本的視点が定まっているとはいえないように思える。

そこに考えが至った時、大変なことを引き受けたと反省したが、時すでに遅かった。原稿依頼の文書が筆者に配達されたのである。その依頼文にこの小稿の表題が仮題として記載されていた。書評という正面からでなく、「……を手にして」という側面からならば手をつけることができると考え直し、先学の導きをたよりとして、キーボードに向かうこととした。

### 二 本書の特徴

本書はB五判、四二〇頁という大部な本である。その構成は三部からなり、第一は、はしがき、編集にあたって、凡例、細目次、変更した文書群名一覧（三四頁）、第二が本文

で二部からなっており（三五四頁）、第一部が所蔵・寄託史料、第二部がマイクロ収集史料、そして第三は、文書群索引、編集後記（三二頁）である。

本書の編集刊行の目的は、史料館収蔵史料の総合ガイド作成にあり、「はしがき」で以下のように述べられている。

当史料館に収蔵されている史料のすべてについて、史料一件ごとに、出所情報、数量や年代、史料群の構造と内容などを概括的に記したものであり、史料群ごとのいわば概要目録である。

すなわち、史料館では、いままでも収蔵史料の案内は「史料館案内」の「収蔵史料」で史料群名を表示する方法で行ってきたが、利用者への検索手段システム「収蔵文書群名一覧」↓「収蔵文書群概要」↓「文書目録」↓「細目録」の第二レベルのマイクロ・レベルの検索手段として（「編集にあたって」六一七頁、全

史料群五三〇件のそれぞれを二二項目によって記述した概要目録によるガイドを作成したのである。

史料群の概要目録。すなわち、史料の発生および蓄積母体である家や団体ごとに把握している単位を史料群とし（本書では文書群とも表記している）、各史料群の全体像をリスト形式ではなく、フリーテキスト形式で記述したものである。これは、一九八五年に安藤正人氏が紹介した欧米記録史料学の目録記述論の基軸のひとつである（「史料整理と検索手段の作成」（『史料館研究紀要』一七号所収）、後に大藤修・安藤正人著『史料保存と文書館学』、吉川弘文館、一九八六年に所収）。

それから約一〇年後に、その理論と技法にもとづいた目録が作成された。この間に、世界的には記録史料情報交換のために目録記述の標準化が大きく進展している。本書はこの動向を積極的に取り入れ、日本における標準化への試行としても作成されたのである。

それ故、この小稿で吟味しなければならぬことは、本書が利用者を史料館収蔵の記録史料の世界へどのようにガイドしているか、であり、そのために、第一には道しるべの方

法、第二には各史料群の再提示方法である。前者はガイドとしての構成の問題であり、後者は各史料群の記述項目の問題である。この二点を欧米の記録史料学と比較し、日本の特殊性を踏まえたものになっているかどうか、にあるであろう。

### 三 ガイドの構成について

本書は、イギリスの目録記述を参考にして作成されている（「編集にあたって」参照）。それ故、本書の特徴を把握するために、その構成をマイケル・クック、マーガレット・プロクター著「記録史料目録記述マニュアル」(Michael Cook & Margaret Procter, *A Manual of Archival Description*, 2nd ed., Gower Publishing Company, Hants, 1989, 以下MAD2と略称する)の記録史料の階層構造と対比した図1を作成した(本書の参照文献は Michael Cook, *The Management of Information from Archives*, Gower Publishing Company, Iants, 1986であるが、MAD2がより体系化しているのでここではそれをとりあげた)。

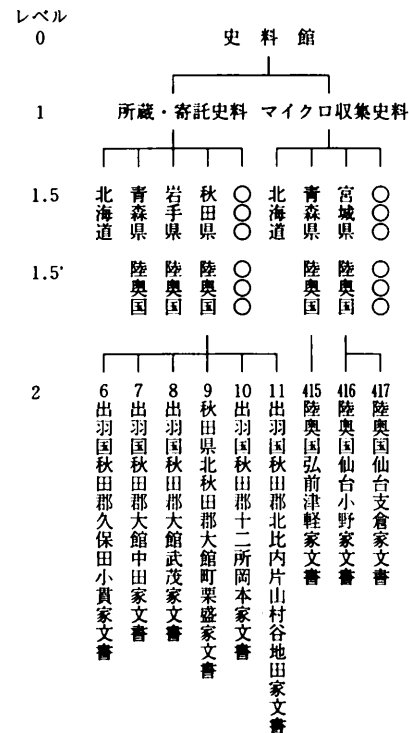
レベル0は「所蔵機関(Repository)」の個別性を表示する情報であり、本書では書名が表示している。

レベル1の「マネージメント・グループ(Management Group)」は、各所蔵機関が、各史料群のそれぞれの性格にもとづいて分類したり、また史料群をマネージメントするために分類する区分であり、必要に応じてさらに下位の分類を行う。イギリスの場合、例えば、公的記録史料と非公的記録史料に区分し、前者は州庁記録史料や学校記録史料など、後者は企業記録史料、教会記録史料、個人・家記録史料などに再区分している。マネージメント・グループを設定する積極的意義は、第一にアーキビストが所蔵資料をマネージメントするために、また調査・収集対象資料の検討に有効な方法であること、第二に利用者へ各史料群(後述のグループ)

の相互関連を知らせるものとして機能するところにある(Michael Cook, *Information Management and Archival Data*, Library Association Publishing Ltd., London, 1993, pp. 67-69)。

本書では、「所蔵・寄託史料」と「マイクロ収集史料」に区分し、さらに各県(各国)別およびその他に細区分してある(レベル1.5, 1.5)。レベル1は記録史料の資料形態についている。この点の説明が見られないが、恐らく史料館の資料収集の歴史的背景と現在の方針にもとづいたマネージメントの表現と思われる。レベル1.5または1.5(サブ・マネージメント・グループ)は、史料館の収蔵史料が全国の近世・近代史料を対象としていることから採用された区分

図1 「史料館収蔵史料総覧」における記述構造



【備考】 レベルはMAD2による。

であろう。

レベル2は「グループ(Group)」で、国際図書館評議会の「国際標準記録史料記述・一般原則」(General International Standard Archival Description: ISAD(G) 1994)『記録と史料』第六号、一九九五年九月)以下ISAD(G)と略称する)のフォンド(Fonds)に該当する。ここでは各史料群名が記載され、その配列は原則として旧郡ごとにまとめている。この史料群の単位は、出所原則にもとづき全史料群を再点検して確定したものである(但し一部不確定なものもある)。基本は、家・組織ごとを単位とし、この他にコレクション史料はそれを単位としている。

#### 四 各史料群の記述について

各史料群の記述量はそれぞれの特性に応じて多寡があるが、平均すると二〇〇字相当である。それは前述のとおり二二項目で記述されているが、その項目とその前提となった作業上の記述項目(データシートのフィールド)およびISAD(G)の記述要素を比較したのが、図2である。掲載項目二二は六分野で編成され、標識、出所、伝来、外形、内容、利用の順序で記述されており(この分

野項目は表示されていない)、ISAD(G)と比べると利用のために提示する情報分野をカバーしている。

項目それぞれをISAD(G)と比較すると、ISAD(G)中の「記述のレベル」、「評価、廃棄処分、保存年限についての情報」、「資料の使用言語」が採用されていない。記述レベルについては本書はグループ(フォンド)を対象としていること、使用言語は日本語、そして史料の選別等の情報は史料館収蔵史料には館設置母体からの引き継ぎ史料がほとんどないということから採用していないと推定される。

各掲載項目の表現は、記号表示、固有名詞ないし普通名詞の表示であり、「歴史」、「伝来」、「構造と内容」などはフリーテキストである。

これらの中で注目すべきことは、第一に「文書群名」を統一して出所の所在地と出所名称を組み合わせて付与したことがあげられる。史料館では従来からそのように史料群名を付与してきたが、今回統一したのである。その結果、グループレベルの史料群の名称のみをみても、ある程度内容が推定されるようになったこと、そして先述のサブ・マネージメント・グループとの連絡が密接

になったことがあげられよう。

第二には、本書がもつとも力点をおいている「歴史」と「構造と内容」の記述が統一になされたことがあげられよう。前者は在来の史料目録中の解説において記述されてきた伝統があるが、後者は先述のとおり八〇年代後半以降導入され、解説で記述されはじめており、それらを踏まえている。

「構造と内容」の記述をみると、基本としては、グループレベルとしての全体像提示がなされている。その中で、サブ・グループレベルの紹介がおこなわれ(本書中①、②等で表示)、さらにサブ・サブ・グループレベルの記述もみられる(本書中① a, b, 等で表示)。また、多くの場合、グループレベルより下位のクラス(シリーズ)レベルの史料群名、アイテム(ファイル)レベルの史料名を列示している。ISAD(G)では、フォンド、シリーズ、ファイル、アイテムのレベルごとに記述することとされているので、下位レベルでは上位レベルの情報を重複してはならないとされているが、本書はグループレベルの記述のみであるため、サブ・グループ以下の記述を含めたのであろうし、またガイドとしてはそ

の方が適切と思われる。

#### 五 ガイド作成のために

このように、本書の特徴は、日本の伝統的な目録記述を踏まえ、欧米記録史料学の理論と技法を積極的に摂取し、日本の記録史料目録を世界的な情報化社会にリンクしようとする野心的なガイドブックである。

今後、国内の各史料保存利用機関においてガイドを作成する時、本書はモデルとなるであろう。その際に一層検討されるべきことを気のついた範囲で記しておこう。

第一は、レベル1のマネージメントグループのことである。本書は資料形態によつて区分しているが、地方図書館では公文書(行政文書)、古文書の二区分を採用している場合が多く、それは有効であろう。工夫を要する点はマネージメント・グループの細区分(サブ)設定である。地域別、記録史料の特性にもとづいた区分を設定した方がより適切にガイドすることができる。マネージメント・グループ(サブを含む)の記述は、MAD2によると、基本は本書のように見出し表示であるが、例えば地域別サブマネージメント・グループを設定した場合、地域の歴史的背景を

記述した概要目録を用意するのは有益であるとしている。

第二には索引のことがある。本書では史料の出所の新旧地名索引および家・組織名索引を添付しているが、このほかに記載された項目の中の「旧支配」、「役職等」の索引も必要である。これらを限られた印刷物に表現することは困難なことであるが、コンピュータでは可能である。

記録史料ガイドは、本書のような刊行物だけではなく、より簡便な加除式スタイルのものも工夫してよいのではなからうか。例えばマネジメント・グループレベルの記述をシートに納め、さらにグループレベルの各史料群もシートとする方法もある。各機関が本書で提示された方法を積極的に吟味し、収蔵資料ガイドを作成し、さらにそれらの標準化を検討する時期に至ったのである。

最後に、本書には表現されていないが、史料館が作業上作成した管理データ(図2参照)の実験を重ね、記録史料に関する一貫した情報管理システムの構築を行うべきであろう。

図2 「史料館収蔵史料総覧」各史料群記載項目およびその作業上の記述項目と「国際標準記録史料記述：一般原則」ISAD(G)の記述要素

『史料館収蔵史料総覧』各史料群記載項目と作業上の記述項目		「国際標準記録史料記述：一般原則」ISAD(G)の記述要素	
本書の掲載項目	データシートのフィールド		
文 書 群	標識 (1) 通し番号 (2) 文書群名 (3) 記号	001 # 標識番号 002 文書群名 003 文書群記号	
	出所 (4) 出所 (5) 地名 (6) 旧支配 (7) 役職等 (8) 歴史	100 名称 110 地名l 11n 地名l+n 120 旧支配 121 役職/身分/職種 130 機能/歴史	
	伝来 (9) 伝来 (10) 文書所有者* (11) 所蔵機関での名称*	200 所蔵者の変遷と移管の経緯	
	デ ィ タ	外形 (12) 数量 (13) 書架延長 (14) 形態 (15) 史料の状態	300 数量 301 書架延長 310 形態/媒体 320 保存の状態(破損状況など)
		内容 (16) 年代 (17) 構造と内容	400 年代 410 文書群の構造と内容
		利用 (18) 閲覧条件 (19) 検索手段 (20) 出版 (21) 関連史料の所在 (22) 利用上の留意点	500 閲覧条件 510 検索手段 520 出版 530 関連史料の所在 540 参考記事 590 利用に関する特記事項
		管 理	受入 _____ _____
	デ ィ タ	整理 _____ 保存 _____	800 整理記録 810 装備記録 820 補修記録 830 マイクロフィルム複製記録 840 その他複製記録
	展 示	_____	900 館内展示記録 901 貸出展示記録
	備 考	_____	990 管理に関する特記事項

[備考] 「『史料館収蔵史料総覧』各史料群記載項目と作業上の記述項目」は同書「凡例」および「編集にあたって」から、「国際標準記録史料記述：一般原則」ISAD(G)の記述要素は「記録と史料」6号、1995年9月から作成(なお、一部翻訳を変更した)。図中\*印はマイクロフィルム複製資料に関連する項目。

# 古代・中世寺院史料の活用

永村 眞

(日本女子大学教授  
史料館客員教授)

古代・中世史料の調査・蒐集は、明治時代より継続的に進められており、蓄積された膨大な史料群が研究を支えてきた。また質・量両面からみて、古代・中世史料の中核は寺院史料群であり、東大寺勅・網封蔵文書(正倉院文書)・東大寺文書・東寺百合文書等は、いずれも古代・中世史研究の基本的素材といえる。ところで従来の寺院史料調査の対象とされたのは、主に世俗社会との接点に生まれた史料であり、寺院社会に固有の宗教的な機能や存続のなかで生まれた史料の多くは放置されてきた。日本史研究者はもっぱら文書・記録を、仏教学や国語・国文学の研究者は経巻・聖教類を調査対象とする傾向が見られる。そこで史料生成の場を踏まえた史料の機能・性格の解明は著しく立ち遅れ、寺院史料はその質・量に比して最も利用されることの少ない史料群となった。

この障壁を打開する契機となったのは、文化財の所在確認と保存・管理という目的のもとに、文化庁をは

じめ都道府県・市町村の文化財担当者や一部先見的な研究者により実施された文化財調査であろう。伝来した史料群を確認し、可能な限り手を加えずに次の時代に伝えようとの意図から、網羅的な現状確認と保存・管理のための調査が実施され史料目録が作成されてきた。このような姿勢のもとでの調査は、恣意的な史料選択を排し史料群全体を対象とするもので、寺院史料はその全貌を明らかにすることになった。例えば公的機関や調査団による伝来史料群の調査のなかから生まれた『東大寺文書目録』『興福寺典籍文書目録』『高山寺経蔵典籍文書目録』『石山寺の研究(校倉聖教・古文書篇)』等は、単に文化財管理の基礎台帳にとどまらず、寺院史料に対する多様な視点を示唆する史料目録として評価されるよう。とりわけ寺院史料に特有の経巻・聖教類について、標準的な調査項目として、書名、員数、成立時代、体裁、欠損、料紙、界線、表紙・外題・首題・尾題・奥書、文首・文尾

法量、訓点等々が掲げられる。これらの項目の過半は書誌学的情報であり、史料の形態情報が優先されているとはいえ、学術的な見識や原本調査の経験により内容や伝来への配慮がなされ、書名・成立時代・員数等を列記した棒目録とは自ずから機能を異にする。そして史料群全体を対象とする網羅的な史料調査の実施、その成果としての多彩な情報を盛り込んだ目録の公刊、このような取り組みにより、寺院史料は新たな研究素材として注目されるに至った。

たしかに寺院史料を対象とする良質の史料目録の公刊は、寺院史料を活用するための前提的な一歩であるが、これによって直ちに寺院史料が効率的に利用できるわけではない。まず史料目録では伝来の現状が尊重され、函単位で収納史料が列記されるが、その配列は原本の生成過程を熟知した上でなされるとは言い難い。生成の場を共有する多種・多様な史料(一件物)は、しばしば伝来の過程でその一括性を失うもので、史料の配列にあたり便宜的に体裁で類聚されることが多い。史料の機能を正確に把握するためには、修学や法会というような史料生成の場の認識が必須であり、この場を介在させるこ

とにより教学史料の活用も可能となる。とはいえ寺院社会における教學活動の解明が不十分な現状では、史料生成の場の復元は大きな課題となっている。また寺院史料を研究素材として利用するにあたり、乗り越えねばならぬもう一つの壁は、記述される仏教教学への理解である。研究蓄積の厚い経巻は別として、聖教類は仏教教学史の分野で取り扱われることも少ない。古代以来の仏法を継承する顕・密寺院では、事相(祈祷作法)を記す密教聖教、論義(経論問答)を記す顕経聖教が膨大な数量で伝来する。これらの聖教類は、各時代における仏教教学の修得や相承の実態を語る貴重な史料でありながら、難解な記述内容によりその利用が阻まれてきた。日本史研究の立場から、顕・密聖教類の高度な理解と利用は望むべくもないが、仏教教学史の後援のもとで、聖教類の性格付けを行う程の見識は必要であろう。すなわち史料生成の場の解明と、記述される仏教教学への理解、これらは新たな研究素材としての寺院史料を活用するために避けることのできな大きな課題といえよう。

# 史料の保存・利用と電子化

蔵持 重 裕

(滋賀大学助教授  
史料館併任助教)

現在、歴史資料の調査・保存に関する機関では、いずれも何らかのかたちで「資料」の電子化が課題になっていると思う。

私の本務校の滋賀大学経済学部附属史料館(以下「史料館」)でも例外ではない。本年度、国立史料館の客員となった機会に、そのノウハウを是非学んでいきたいと思う。

ところで、どの機関でも「資料」の電子化が課題にはなっていない。依然として理解と姿勢には様々な差がある。積極的に成功している機関もあれば、一方で「マニヤックな人物が居ないと駄目」と言いきる人達もいる。コンピュータに無縁な人も居るであろうし、これを非難すべきでもない。私には直面している苦勞がよく分かる気がする。

結局、各機関内の職員間に認識の差があり、なぜ電子化が必要かというそもそもの確認が必要になってくることになる。

が取り出せる汎用性が要求される。

保存という面では、原本の代替という意味がある。資料は全て貴重なものには変わりがないが、特に貴重書として扱うことが必要なものがある。また、保存状態が悪く扱いに注意の要するものもあろう。こうした資料の場合、電子化することによって原本を直接観なくても済む場合もある。原本を調査・観察することはもとより重要な意味があり、新しい発見があることはしばしば経験するところでもある。しかし、針小棒大に言えば、これはゆるやかな資料の劣化をまねいていることでもある。したがって、この代替で済ませることが出来るならば意味のあることであらう。

業務の合理化・迅速化という面では、電子化されたものの検索機能がある。この場合最も効果的なのは資料目録の検索である。従来はカード化されていたものを電子化し、閲覧したい資料をリストアップするのである。しかし、これも言うほど易くはない。本務の「史料館」の例であ

るが、これまで作成してきた史料目録の蓄積は、それこそ数十年の間に亘っているので、目録の作成の仕方に「歴史」があつて、現時点から見ても十分なものがあるというよりは、多いと言った方が良いかもしれない状況にあるからである。ただし、自己弁護するのではないが、これは一概に非難できない。なぜならそれはそのまま史科学・古文書学の歴史そのものでもあつて、滋賀大学としては学習のプロセスでもあるからである。電子化・データ化は「規格化」である。しかし、学問は永遠に「規格化」をめざしながら、諸説の自立こそ健全でもあり、常態でもある。この矛盾を了解しつつ、現時点でのベストを将来の改訂を承知しておかないと、虚しさや疲労感が残る。

業務の合理化と言ったが、史料目録での検索であるならばカードの方がよっぽど早い。電子化は一つの仕事である。つまり、将来は世界的に汎用性に到達するであらうという希望をもつことなのである。

以上二点はそのまま利用者の便につながる。利用者の資料閲覧の性格にもよるが、原本ではなく画像で済むことであれば、様々な制限を受けることなく観察することが出来る。

拡大や縮小、プリントも可能である。目録の検索も図書館等ですでに実施されているから、慣れてしまえば簡便である。

しかし、利用者のキーワードによる検索については利用者・研究者によってキーワードが異なるので、フルテキストの入力ということになる。ここでの困難は、漢字・表記上の統一である。割注、旧漢字、本字、異体字などの処理規則が要求され、結局、マークアップランゲージで書くことが要求される。

私自身、利用者である研究者の立場からすればこれらは大変有り難いのであるが、問題はこうした整理・作業が終了しなければ資料の利用が出来ないので困るのである。したがって、どうやら画像の提供を先行するというのがとりあえずの妥協点のように考えている。

平成九年度史料管理学研修会(通算四二回)の開催予定  
長期研修課程

国文学研究史料館 東京会場

前期 九年七月一日～七月二八日

後期 九年九月一日～九月二六日

短期研修課程

沖縄県南風原町

九年十一月一日～十一月二二日

(前・後期、短期とも最後の二週間はレポートの作成にあてる)

# 平成八年度春期特別展示・講演会

## 「近世文字社会のひろがり」

### ―史料館収蔵史料展―

国文学研究資料館の平成八年度の春期特別展示・講演会は、史料館が主体となって、「近世文字社会のひろがり」をテーマに開催された。

展示は五月十三日(月)～同二十四日(金)の十二日間(土・日も開館)。

講演会は、五月十七日(金)午後に行われた。

展示は、序章・第一章～第四章・終章、特設コーナー、パネルによって構成された。

その内容は次の通りである。

「序章 文字社会のひろがり」では、手習手本・国々の名物つくし番付等で近世の民衆の文字社会を象徴的に示し、本展示の導入とした。

「第一章 文字による支配」は、①村の支配制度、②年貢の村請制、③村の法度からなり、文字による近世社会の支配の仕組みを示した。

「第二章 権利を守る」は、①小農家族と家訓、②家相続と遺言状、③家格と由緒書、④証文と契約、⑤抵抗としての文字の五節からなり、村人が読み書き算用を身につけるこ

とにより、恣意的支配を排除し、自分の意思を文字で表現したり、証文や契約書が作成される姿を示した。

「第三章 生活を記録する」は、①誕生から元服まで、②結婚儀礼、③先祖祭祀、④多様な日記の出現、の四節からなり、単婚小家族による「家」の成立と、家永続を図るための様々な記録が作成された様子を示した。

「第四章 文字を学ぶ、楽しむ」は、①文字学習の体系化、②蔵書と貸借、③俳諧、落首・風刺、④情報と近代化の四節から編成され、文字文化によってネットワーク化された近世社会には、様々な情報があふれ、人々の好奇心を刺激し、読み書きを楽しむ世界を生むと同時に、国の内外の情報を手にした有様を示した。

「終章 往來の文字」は、様々な商売の看板や領主による高札を掲し、近世の町村には、文字が豊富に見られるようになったことを示し、文字社会の広がり了的姿を締め括った。このほか、「特設コーナー」として、さまざまな紙、ふえる紙をテーマ

に楮・三極・雁皮の植物展示やそれぞれを素材とした文書等を展示した。また「写真パネル」では豪農の帳蔵や手習師匠を祀った筆塚等を掲示した。

展示史料は全部で二二四点に及んだ。この展示に際しては、史料保存の視点から次のような改善も実施した。

展示ケース内の低部に調湿ボードを敷き、適湿の維持を図った。紫外線カット蛍光灯(美術館用)の照明と簡易な史料保護展示台を新設し、展示史料の劣化防止に努めた。

さて公開講演会は、次の三名によって実施された。

「近世私文書の世界」

史料館長 森 安彦

「近世の農民日記」

史料館教授 高木俊輔

「近世村落文化の構造―文字文化と非文字文化―」

国立歴史民俗博物館教授

高橋 敏

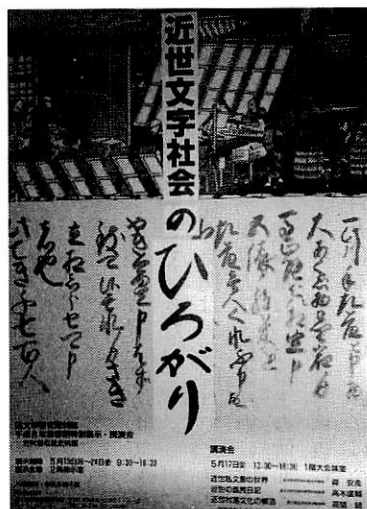
講演会の当日は講演に先立ち「展示解説」を実施した。

今回の特別展示・講演会では、とくに国文学と歴史学との接点となる主題を選び、双方に興味をもってもらうように工夫した。

お蔭で、八七二名の入場者と公開講演会には二八七名という多数の方々の参加を得ることができた。

史料館もかつて文部省史料館時代には、史料の公開展示を度々実施してきたが、国文学研究資料館史料館となつてからは、初めての本格的な展示であった。開催するに当り、佐竹館長をはじめ整理閲覧部の方々の協力を得た。史料館では、内部に展示委員会(森・鈴江・丑木・山田・青木)を設置し、六か月間の検討期間を経て、史料館全教官の分担によって実現したものである。また、「展示品解説」(二〇頁)のパンフレットを作成し、参加者に配布した。この展示は史料館の、これまで蓄積した史料学の研究成果の一端を世に問うことにもなったのである。

(森 安彦)



## 特定研究「収蔵史料の修復・復元方法に関する

## 基礎的研究」による研究成果

本稿は、平成三年度より七年度の五カ年継続で行った特定研究「収蔵史料の修復・復元方法に関する基礎的研究」において実施した研究成果について概要を報告する。

史料館で現在収蔵している史料三九三件、約五〇万点の内、断裁されていたり、虫喰い等により破損の甚だしいものや、虫糞や水被りにより史料が板状になり剝離が困難なもの等々、現状のままでは利用に供することができないものがある。特に断裁された史料の高島藩領村々宗門人別帳（約四五〇冊）は、寛文年間（一六六〇年代）から約二〇〇年間が揃っており、藩庁に伝存され現存する極めて稀な史料であるが、一冊が二―五分割に断裁され、このままでは利用に供することができない。

本研究は断裁史料のみならず、個々の史料の特質とその破損状況に応じた最適な修復（虫損直し、裏打ち・綴じ直し等）や復元方法とその技法について、館外の研究者及び専門家と共同で研究を行い、その成果に

基づき具体的な修復・復元作業を実施しようとするものである。史料の修復にとって重要なことは、まず、その史料に修復を加えることの可否判断であり、次に修復方法を研究し、選択することである。それには対象となる史料そのものについての材質・内容・形態等、多角的検討と研究が不可欠である。しかも、修復は史料の永続的保存を保証し得るものであると同時に、反復の利用に応じられるものであり、さらに簡便で経済的な方法を追求することが求められる。

修復方法の研究においては、紙の化学的劣化要因と対策についても調査研究を行った。特に酸性紙対策および脱酸処理の技術の開発状況については、少量規模の脱酸法および紙強化法、一括大量規模で処理する方法について、各々の方法の短所・長所および特徴の比較検討も併せて行なった。

研究には史料館教官一〇名に外部の保存科学・情報科学の専門家が加わり、文書館など史料保存利用機関

関係者との合同研究会を開催し、研究を進めた。なお、史料管理研究室が設置された平成五年度より、史料管理研究室客員教授および客員助教授（任期平成七年度より）が、研究テーマ「史料管理の理論および技法に関する調査研究―史料の保存と修復に関する研究」として、運営および検討協議に加わり、研究の中核となつて研究を進めた。

最終年度には、三回の研究会を開催し、研究報告として、高橋実（茨城県立歴史館）「文書館の環境管理の実際」、青木睦（史料館）「世界の文書館における建築・設備について」、龍野直樹（和歌山県立文書館）「複合施設内文書館における建築・設備の課題」、田中康雄（群馬県立文書館）「群馬県文書館における書庫増築の概要と問題点」、沢村正信「断裁史料の復元におけるコンピュータ支援の成果」、二宮修治「紙史料の保存と環境汚染測定」、稲葉政満「文化遺産保存科学専門職の養成」の七報告があり、毎回の研究会の場において活発な意見が交わされた。

今回の調査研究を通して得られた保存科学の専門家との繋がりは最大の収穫であった。今年度より文部省科学研究費補助金（試験研究B・基

盤研究A-1）「歴史史料の材質劣化評価への化学発光の応用研究」の交付を受けたので、この研究組織で得られた経験と成果を活かしていくよう努力していきたい。

史料保存機関は、現時点でとりうる最善の保存方法・修復技術に関する調査を積み重ね、たゆまぬ研究を継続する姿勢で史料の保存修復にあたらなければならぬ。終了にあたり、本研究による成果の重要性を改めて認識しているところである。

本研究の成果の第一に、断裁された高島藩領村々宗門帳一七〇〇冊あまりが復元作業を終えて公開されたことがある。加えて酸性紙史料の修復技術の研究、焼け焦げた被災史料の修復技術などについても多くの知見を得ると共に実施技術の研究を行うことができたことである。

この研究と実践技術の成果を実用化し、文書館ならびに記録史料を収蔵する多くの史料保存利用機関に広く普及するようにするには、なお研究と準備が必要であるが、是非とも近い将来に史料館に保存修復専門の研究部門の体制整備を実現し、わが国の記録史料保存システムの発展、充実に貢献したいと決意を新たにしている。

（青木 睦）



## 総合研究 A 「幕藩領主文書と村方・町方文書群の発生・

## 展開並びに伝存に関する史料学的研究」第 1 回研究会

昨年度より、当館の教官を中心として表記の共同研究を三年計画で行っている。その第一回の研究会が一九九六年二月二七日に国文学研究資料館において開催された。出席者は、笠谷和比古氏（国際日本文化研究センター）・渡辺尚志氏（一橋大学）・富善一敏氏（日本学術振興会特別研究員）ほか当館教官一〇名の合計十三名であった。

研究会では、まず最初に本研究の趣旨を説明し、次に各研究分担者が本研究にかかわつての問題関心をひとわたり披露した後、以下の順に報告が行われた。

## ①大友一雄「岐阜県歴史資料館蔵

「飛騨郡代高山陣屋文書」調査報告―飛騨郡代高山陣屋の組織構造と文書群管理の一端に注目して―

## ②渡辺浩一「高山町会所文書の史料「管理」と原秩序」

③丑木幸男「近代的史料管理秩序の形成―高山町会所・戸長役場文書の引継目録からみた―」

①は、飛騨郡代文書の特徴として

役人関係の日記・御用留が大量に含まれていることをまず指摘した。次に、大原驛動鎮庄後の地役人の処分に伴う寛政前期における高山陣屋の組織改革により、地役人の日記・御用留の作成のされ方が変化することを指摘した。すなわち、それまでは御樽木方・銀山方・町在廻方といった「懸り」ごとに作成されていたのが、「懸り」が廃止され「御用場」に組織が一元化されることに伴い、日記・御用留は「御用場」のそれに統一されるのである。また、弘化二年の郡交代に際しての事務引継文書である「演説書」を分析して、史料の作成・管理・引継の実態の一端を明らかにした。さらに、郡代をめぐる史料学的研究の可能性をいくつか提起した。

②は、まず最初に高山町会所（惣町の会所）の性格を、会所の都市空間のなかでの位置とその間取り図の分析から、陣屋の出先機関としての性格が強いものと仮定した。これを

前提としつつ、「町会所文書」の近世最終段階における管理形態を分析した。それによれば、惣町の会所に保管される文書は日記・願書留などを除いては行政執行過程に生じる些末な文書であり、検地帳を始めとする主要な文書は共同管理ではなく世襲の三人の町年寄が保管していたという。さらに、町年寄文書の下位の位相に町組頭文書が存在が確認され、町組頭の交代にあつてはそれら文書群が引き継がれることが判明した。しかし全体としては、高山町方の史料管理においては町年寄の主導性は明白であるとした。

③は、高山町会所・戸長役場・町役場文書に残された明治六年から三年にかけての二二点の引継目録・管理目録を概観した報告である。まず、近代における高山の行政組織の変化を確認し、そのうえで各目録を検討した。その結果、明治六年に町年寄保管文書と町会所保管文書が合体したこと、明治一年に町ごとの分類が戸口・管轄などの主題分類に変更されたこと、明治一七年までは引継目録に近世文書が登録されていること、明治三三年までは史料の選別が行われていないことなど、史料管理史研究において興味深い事実が

明らかになった。明治六年の変化は、大区小区制の施行に伴うものであるが、同一一年と三三年の変化は行政組織の変化によるものではなく、組織内的な文書管理の変化である可能性がある点が重要であろう。

各報告のあとに簡単な討論が行なわれた。その要旨は以下の通りである。①に関しては寛政期における行政組織の簡素化は、官僚組織の発展という一般的趨勢とどのように整合的に理解できるのかという問題が提起された。②については、近世の「高山町会所文書」の管理形態からすれば現在の文書群名称に重大な疑問が生じる、また、この文書群の近世最終段階での性格は、惣町文書というよりも町年寄文書というべきではないかといった点が指摘された。③については、現状の袋入り一件別整理を実施した時期、近世史料が戸長役場に引き継がれ非現用文書として保存された要因、中央政府の文書行政とのかわり、などの説明が今後の課題であることが確認された。全体討論では、三つの報告に見られた出論論的アプローチも新しい史料学を構築するためには必要であるとの意見が特に重要であった。（渡辺浩一）

## 特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の

### 体系化に関する研究」第2回準備研究会

史料館がかねて計画中の特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」は、このたび経費が認められ、今年度（平成八年度）より研究開始のはじめと

なつた。これを機に史料館が従来から行ってきた記録史料の保存・活用に關する科学的研究を強力に推し進め、二十一世紀の情報時代に適応した新しい学問分野を確立していきたいと考えている。

研究計画によれば、館外からも多数の研究者に加わっていただき、次の五つの研究部会を設けて共同研究を実施することになっている（部会名称については変更の可能性がある）。①「史料管理学」②「評価と収集」③「整理と情報化」④「保存と修復」⑤「文書館と専門職」。

期間は五年間を予定。成果は「史料学・史料管理学講座（仮称）」として出版する計画である。なお今年度の研究参加者と研究実施状況については、本誌次号で報告することにしたい。

以下に記すのは、平成八年一月二三日に国文学研究資料館で開催した本特定研究のための第2回準備研究会の概要である。

本研究会は平成七年一月の第一回準備研究会（本誌六三号参照）に続くもので、出席者として、記録史料の保存・活用の問題に關心の深い歴史研究者や文書館員など二十人を招待した。

午前十時半、森安彦史料館長の挨拶によつて開会。安藤が研究会の趣旨説明をした後、次の三本の報告が行われた。

①山田哲好（史料館）「史料管理学（文書館学）の研究分野と研究動向——文書館学文献目録」の分析から——

②倉沢愛子（名古屋大学）「歴史研究者とアーキビストの研究協力体制をどう築くか——インドネシア現代史における経験から——」

③青山英幸（北海道立文書館）「目録記述論の現状と課題——国際文書館評議会作成の記録史料記述

の国際基準をめぐって——」

山田報告は、本特定研究の個別研究課題を設定する際の参考とするため、史料管理学（文書館学）の研究動向を総合的に見ておこうというもので、発行されたばかりの全史料協関東部会編『文書館学文献目録』（岩田書院）を分析した。同書編集の元となった七八〇〇件に及ぶ文献情報は、データベースの形で山田研究室に保管されており、検索コードによつて自由にソートすることができ。これを利用して、記録史料論・記録史料管理論の各研究分野に關する論文数の変遷や内容的な特徴が述べられた。

倉沢氏には、日本占領期インドネシア史研究者の立場から、日本とアジアをめぐる現代史料の状況、および史料管理学的な課題について話していただいた。最初に「日本占領下のジャワ社会の変容」を研究する過程で経験した日本、インドネシア、オランダ、イギリスの史料状況が述べられ、日本軍政関係史料や現地地方政府史料の消滅の状況が考察された。後半では、史料不足に対処するために歴史家とアーキビストがどう協力すべきかという話題に移り、伝統的な記録史料以外の多角的な史料

収集の重要性、すなわち映像・音声・物質資料やオーラル・リサーチによる記録の収集を進める必要があることが指摘された。

青山氏には、本特定研究の計画課題③「整理と情報化」に關わつて、国際的な記録史料目録記述標準化の動きをめぐる報告をお願いした。まず米・英・カナダなど欧米各国の事情が紹介され、次いで国際文書館評議会が作成した「記録史料記述に關する原則に關する声明」および「国際標準記録史料記述・一般原則」を中心に、国の壁を超えた記述標準化と情報交換の動きが現実のものとして進んでいる様子が詳しく述べられた。結びでは、日本における目録標準化の課題として、欧米目録記述論の理論と技法の積極的導入とともに、日本の記録史料目録の歴史の変遷と現状の調査、図書館情報学など関連分野との連携、目録記述の標準化を念頭に置いた実際の文書群を使った記述実験、などを行う必要性が指摘された。

報告ののち、出席者の中で活発な意見交換がなされた。これら準備研究会の成果は、いずれも今年度から本格的に始まる特定研究に活かされることになろう。

（安藤正人）

# 受贈図書 平成七年度 (二)

(一)内は寄贈者名(敬称略)ただし、省略されている場合があります。

写真でみる横浜大空襲(横浜市総務局)

横浜と上海(横浜開港資料普及協会)

横浜関係新聞記事年表稿(横浜開港資料館)

新潟市史 通史編1(新潟市)

わたしたちの富山湾(富山県)

宮保遺跡群(石川県立埋蔵文化財センター)

小川(同右)

小浜市史 諸家文書編四 藩政史料編二

・三 通史編上巻 絵図・地図編(小浜市)

文化講演録第三集(福井市立郷土歴史博物館)

慶永公名臣献言録(二)(同右)

敦賀半島の歴史調査報告(第1次)~(第6次)(敦賀女子短期大学多仁研究室)

塩尻市誌 別冊(塩尻市)

松本市史 第四巻 旧市町村編I(松本市)

内陸地域文化の人文科学的研究II(信州大学人文学部)

長野市民俗文化財調査報告書I(長野市立博物館)

清見村誌 資料篇下(岐阜県) 清見村教育委員会)

各務原市資料調査報告書 第18・19号

(各務原市歴史民俗資料館)

義民甚兵衛と孝子勘左衛門(岐阜県荘川村)

館蔵品図録 古地図II(岐阜市歴史博物館)

館蔵民具選 第1集(同右)

静岡県史 資料編12・22・別編1(静岡県)

半田市誌 宗教編(半田市)

沼津市歴史民俗資料館資料集 12・13

西尾の人物誌(西尾市教育委員会)

刈谷市史 年表(刈谷市)

刈谷市史 別巻(総集編)(同右)

豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第21~25集(豊橋市教育委員会)

田原町指定天然記念物藤七原湿地植物群

落調査報告書(愛知県) 田原町教育委員会)

津市の歴史散歩(津市教育委員会)

平松楽齋文書18(同右)

四日市市史 第五・十六巻(四日市市)

大和十津川出陣記録(堀井光次)

彦根藩史料叢書 侍中由緒帳2(彦根城博物館)

岩滝町誌(京都府) 岩滝町)

三和町市 上巻(京都市) 三和町)

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第27・29集(宇治市教育委員会)

向日市埋蔵文化財調査報告書 第39・40集(向日市教育委員会)

文化財宇治 '94(宇治市教育委員会)

泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成5年度(泉佐野市教育委員会)

泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告 37・39~41(同右)

泉佐野の歴史と文化財 第2集(同右)

泉佐野市文化財発掘調査報告 27(同右)

塩の古代史―和泉の製塩遺跡をめぐって―(同右)

旧和泉郡黒鳥村関係古文書調査報告書(同右)

大阪市史料 第四十三~四十五輯(大阪市史編纂所)

旧佐賀藩大坂蔵屋敷船入遺構発掘調査報告(大阪市文化財協会)

枚方市史 別巻(枚方市)

大谷女子大学資料館報告書 第31・32冊

泉南市文化財調査報告書 第27集(泉南市教育委員会)

第7回 歴史の華ひらく泉南シンポジウム(同右)

羽曳野市史 第3巻(羽曳野市)

羽曳野資料叢書 第八巻(同右)

八尾市文化財調査報告 31・32(八尾市教育委員会)

相生市史 第八巻下(相生市教育委員会)

淡路文化史料館古文書シリーズ 第一輯(洲本市立淡路文化史料館)

出石町史 年表(別冊)(兵庫県) 出石町)

福崎町史 第二巻(兵庫県) 福崎町)

三木市有宝蔵文書 第二巻(三木市)

奈良県同和問題関係史料 第一集(奈良県教育委員会)

津山市史 第四巻(津山市)

吉井町史 第一巻(岡山県) 吉井町)

熊山町史 参考資料編(岡山県) 熊山町)

呉市史 第八巻(呉市)

古文書調査記録 第18集(福山城博物館友の会)

広島県立文書館資料集2

岩邑年代記(六)(岩国徴古館)

寛政期の旧吉野川河口域における利水問題と第拾閘分水(松下師一)

徳島県における史料管理学をふまえた史料整理の実践について(同右)

松山市史 第三~五巻(松山市)

福岡県史 近代史料編 福岡県地理全誌(六)(福岡県)

小森承之助日記 第一巻(北九州市立歴史博物館)

新熊本市史 史料編第八巻(熊本市)

五和町史資料編(その2)・(その3)(熊本県) 五和町教育委員会)

大分県先哲叢書 大友宗麟・瀧廉太郎・



山大学人文学部  
室内と家具の歴史(小泉和子)  
近世の土地売買と社会慣行の研究(白川部達夫)

馬の文化叢書2・3・6(馬事文化財団)  
重要有形民俗文化財大森及び周辺地域の海苔生産用具(大田区立郷土博物館)

日本乗合交通編年史(倉島幸雄)  
仏教美術研究上野記念財団助成研究会研究報告書 画像蒐成Ⅲ『覚禪(抄)』

2  
三井文庫別館蔵品図録茶道具Ⅳ・V  
足利將軍若宮八幡宮参詣絵巻(国際日本文化研究センター)

芭蕉記念館所蔵本『狂歌江戸砂子集』  
(江東区芭蕉記念館)

大日本史料 第二編之二十五・第七編之二十七・第八編之三十六(東京大学史料編纂所)

大日本古文书 家わけ第十七 大徳寺文書別集 眞珠庵文書之三・家わけ第十九 醍醐寺文書之十(同右)

大日本古文书 幕末外国関係文書之四十五(同右)

大日本古記録 民経記(七)・言緒卿記(上)(同右)

大日本近世史料 廣橋兼胤公武御用日記(三)(同右)

大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料十九(同右)

日本関係海外史料 オランダ商館長日記 譯文編之(八)(同右)

日本荘園絵図聚影 一上 東日本一(同右)

図書叢書 伏見宮旧蔵書集成二・九 条家本玉葉一(宮内庁書陵部)

北海道開拓記念館研究報告 第十四号(北海道開拓記念館)

ペサウンコツ遺跡 一九九五(北海道門別町教育委員会)

青森県郷土館調査報告 第35・36集 石巻古文書の会テキスト解説シリーズ 第三册

寒河江市史編纂叢書 第51集(寒河江市教育委員会)

水戸市史 下巻(二)(水戸市役所)

龍ヶ崎市史 原始古代資料編(龍ヶ崎市教育委員会)

鎌ヶ谷市史 資料編Ⅳ・上(近・現代I)(鎌ヶ谷市)

千葉県指定有形文化財木造五智如来坐像保存修理報告書(船橋市教育委員会)

日野市史 通史編二(上)・(中)(日野市編さん委員会)

地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書3(地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会)

茅ヶ崎市史 現代2(茅ヶ崎市)

海老名市史叢書2(海老名市)  
大和市史資料叢書5(大和市役所)

写真集 塩尻市(塩尻市)  
近世村落の村運営と村内小集落―信州佐久郡下海瀬村を事例として―(牧原成征)

五郎兵衛用水を歩く―見学ガイドブック―(長野県 浅科村教育委員会)

葦山町史 第八・十巻(静岡県 葦山町史刊行会)

細江町史 資料編九(静岡県 細江町)

金谷町史 資料編三(愛知県 金谷町)

天竜川・豊川流域文化圏から東・西日本をみる(愛知大学総合郷土研究所)

宇治市歴史資料館本「正保山城国絵図」の記載内容(蟻永和貴)

戦時下の枚方町―枚方町事務報告―(枚方町)

明治四年廢藩 旧岩国藩御家人帳(岩国徴古館)

海南町史 上・下巻(徳島県 海南町)

那賀川の治水計画(建設省四国地方建設局)

本渡市古文書史料集 天領天草大庄屋木山家文書 御用触写帳 第一巻(本渡市教育委員会)

沖繩県史料 前近代8(沖繩県教育委員会)

自家年譜(森山孝盛日記)中(国立公文書館)

公文類聚目録 第11(同右)

平成八年度 (一)  
東京都立中央図書館中国語図書目録 一九七二―一九九三

東京都立中央図書館逐次刊行物総目次・総索引一覽年報・年鑑 一九九五年10月末現在 上巻・下巻

神奈川県立図書館・神奈川県立川崎図書館増加図書著者・書名索引 一九九四

(神奈川県立図書館)

北海道開拓記念館一括資料目録 第28集 市立函館図書館蔵郷土資料分類目録 第12分冊

小樽商科大学経済研究所特殊文庫目録 9

釧路市立博物館収蔵資料目録(XV) 江差町古文書資料調査所蔵目録(北海道) 江差町教育委員会

札幌大学図書館所蔵川島文庫目録 青森県立郷土館収蔵資料目録 第5集

藤巻家文書目録(斉藤悦郎)

福島県西会津町史資料目録 第7集(西会津町史刊行委員会)

東海村諸家文書目録(茨城県 東海村) 松本家書簡目録(茨城県) 五霞村教育委員会

群馬県立文書館収蔵文書目録 13

群馬県立歴史博物館所蔵資料目録 美術工芸ⅠⅡ・歴史ⅠⅡ・自然ⅠⅡ

群馬県行政文書件名目録 第7集〔群馬県立文書館〕

群馬県史収集複製資料目録 第2集〔同右〕

埼玉県立文書館収蔵文書目録 第31集  
収蔵文書目録 第七集〔千葉県文書館〕

袖ヶ浦市史料目録 〔1〕・〔2〕〔袖ヶ浦市教育委員会〕

千葉県史編さん資料 千葉県地域史料現  
状記録調査報告書 第1集〔千葉県〕

明治大学所蔵内藤家文書増補・追加目録  
〔5〕〔明治大学刑事博物館〕

学習院大学史料館所蔵史料目録 第11号  
芭蕉記念館所蔵資料目録 Ⅷ〔江東区芭蕉記念館〕

小堀家文書目録〔東京経済大学図書館〕

日の出町史料所在目録 第6集〔東京都〕日の出町教育委員会〕

品川歴史館資料目録 竹内重雄大正風俗  
スケッチ〔品川区立品川歴史館〕

東京都公文書館所蔵行政文書目録 学事  
編

東京都西多摩郡五日市町大悲願寺所蔵文  
化財調査報告〔下〕〔東京都教育庁生涯学習部文化課〕

三井文庫所蔵史料主要帳簿目録〔京本店  
等作成分〕

憲政資料室収蔵資料一覧〔日本古蹟関係  
資料〕・〔憲政資料〕〔国立国会図書館  
専門資料部政治史料課〕

専門資料部政治史料課

## 1996年度 史料管理学会 カリキュラム構成

### A. 長期研修課程 (東京会場)

- 一 [文書館総論]
- 1、文書館の歴史 史料館助教授 安藤 正人
  - 2、現代の文書館とアーキビストの役割 史料館長 森 安彦
  - 3、地域社会と文書館 八潮市立資料館長 遠藤 忠
  - 4、文書館の法律問題 信州大学教育学部教授 井出 嘉憲
  - 5、史料の利用と普及活動 史料館助教授 山田 哲好

- 一 [記録史料論]
- 1、記録史料論総論 史料館教授 丑木 幸男
  - 2、情報とコミュニケーション IRIS 情報学研究所長 仲本秀四郎
  - 3、組織体と記録 日本大学商学部教授 友安 一夫
  - 4、古代中世史料論 東京大学史料編さん所教授 林 譲
  - 5、近世史料論Ⅰ (総論・幕藩寺社の史料) 史料館助教授 大友 一雄
  - 6、近世史料論Ⅱ (村の史料) 史料館教授 高木 俊輔
  - 7、近世史料論Ⅲ (町の史料) 史料館助手 渡辺 浩一
  - 8、近現代史料論Ⅰ (行政の史料) 史料館教授 鈴江 英一
  - 9、近現代史料論Ⅱ (個人の史料) 国立国会図書館政治史料課長 渡辺 樹
  - 10、近現代史料論Ⅲ (民間の史料) 史料館教授 丑木 幸男
  - 11、近現代史料論Ⅳ (企業の史料) お茶の水女子大学文教育学部助教授 小風 秀雅
  - 12、史料論特論 (被差別の史料) 五郎兵衛記念館学芸員 斎藤 洋一

- 一 [記録史料管理論(1)総論及び調査収集論]
- 1、記録史料管理論総論 史料館教授 鈴江 英一
  - 2、記録管理論 あふれんつ研究所代表 作山 宗久
  - 3、史料調査論 史料館助手 渡辺 浩一
  - 4、官公庁文書の評価と移管 北海道立文書館主任文書専門員 佐藤 京子
  - 5、地域史料の収集と受入 神奈川県立公文書館郷土資料課長 樋口 雄一
  - 6、史料管理学特別講義 日本女子大学教授・史料館客員教授 水村 眞

- 一 [記録史料管理論(2)整理記述論]
- 1、史料整理と目録編成の理論 史料館助教授 安藤 正人
  - 2、近世史料の整理と目録編成1 史料館助教授 大友 一雄
  - 3、近世史料の整理と目録編成2 史料館助教授 大友 一雄
  - 4、近現代史料の整理と目録編成 史料館教授 同助教授 鈴江 英一 山田 哲好
  - 5、文書館とコンピュータ 国文学研究資料館研究情報部助教授 原 正一郎 山田 哲好

- 一 [記録史料管理論(3)保存管理論]
- 1、文書館における史料保存活動 史料館助手 青木 睦

- 2、史料の保存環境と劣化損傷要因 東京国立文化財研究所部長 増田 勝彦  
東京芸術大美術学部助教授 稲葉 政清
- 3、史料の劣化損傷の予防 史料館助手 青木 睦
- 4、劣化損傷史料の保存修復Ⅰ 東京国立文化財研究所部長 増田 勝彦  
東京芸術大美術学部助教授 稲葉 政清
- 5、劣化損傷史料の保存修復Ⅱ (柳宇佐美松鶴堂 代表取締役 宇佐美直八  
取締役 宇佐美直秀  
取締役 田中 保)
- 6、マイクロ写真の利用 日本写真映像専門学校名誉校長 後藤 公明
- 7、文書館の防災対策 国際連合地域開発センター防災計画主幹 小川雄二郎

- 一 [史料管理の実際—施設訪問—]
- 1、八潮市立資料館における史料管理 八潮市立資料館長 後藤 忠
  - 2、東京大学史料編纂所における史料管理 東京大学史料編さん所助手 山口 和夫
  - 3、国立公文書館における史料管理 国立公文書館主任公文書専門官 伊藤 信男
  - 4、国立国会図書館における史料管理 国立国会図書館政治史料課長 渡辺 樹
  - 5、神奈川県立公文書館における史料管理 郷土資料課長 樋口 雄一  
行政資料課長 高橋 宏

- B. 短期研修課程 (広島会場)
- 一 [文書館総論]
- 1、現代の文書館とアーキビストの役割 史料館長 森 安彦

- 一 [記録史料論]
- 1、記録史料論総論及び近現代史料論 史料館教授 丑木 幸男
  - 2、近世史料論Ⅰ (総論・町と村の史料) 史料館教授 高木 俊輔
  - 3、近世史料論Ⅱ (幕藩の史料) 史料館助教授 大友 一雄
  - 4、史料論特論 (被差別の史料) 五郎兵衛記念館学芸員 斎藤 洋一

- 一 [記録史料管理論]
- 1、地域史料の調査と収集 長野県立歴史館専門主事 樋口 和雄
  - 2、官公庁文書の評価と移管 史料館助教授 安藤 正人
  - 3、近世史料の整理と目録編成 史料館助手 渡辺 浩一
  - 4、近現代史料の整理と目録編成 史料館教授 鈴江 英一
  - 5、史料の保存環境と劣化損傷の予防 史料館助手 青木 睦
  - 6、劣化損傷史料の保存修復 宮内庁書陵部修補師長 横山 謙次  
同総理府技官 長谷川 修
  - 7、史料の利用と普及活動 史料館助教授 山田 哲好

- 一 [史料管理の実際—施設訪問—]
- 1、長野県立歴史館における史料管理 長野県立歴史館専門主事 小平 千文

教学研究資料目録 1〔神社本庁教学研究研究所〕

ハーバード大学ロースクール図書館所蔵

日本史関係資料目録・解題〔藤井謙治〕

長野県小海町松原湖史料調査報告書〔牛米努〕

海老名市史資料所在目録 第7～9集

〔海老名市〕

郡山市歴史資料館収蔵資料目録 第10集

横浜開港資料館所蔵五味亀太郎文庫目録

〔横浜開港資料館〕

横浜開港資料館収蔵行政資料目録〔同右〕

新潟県公文書簿冊目録 第2集

信濃国埴科郡下戸倉村名主坂井家文書目録〔坂井修一・坂井永一〕

矢島村古文書目録〔長野県〕浅科村教育委員会〕

信濃国佐久郡平原村小林家古文書目録〔小林七左〕

角竹郷土史料文書目録 上・下巻〔高山市郷土館〕

静岡県立中央図書館郷土資料目録 昭和60年10月～平成7年3月

富士市史資料目録 第6輯〔富士市〕

静岡県榛原郡金谷町所在文書目録 第6集〔金谷町役場〕

名古屋博物館蔵品目録 第4分冊

知多総研古文書目録 第一・二集〔日本福祉大学知多半島総合研究所〕

彦根城博物館古文書調査報告書 I

京都府資料目録 追録 No11〔京都府立総合資料館〕

天龍寺古文書目録補遺〔I・II・III〕

〔同右〕

向日市古文書調査報告書 第四集〔向日市文化資料館〕

土佐派絵画資料目録〔五〕〔京都市立芸術大学芸術資料館〕

高槻市史料目録 第十八号〔高槻市役所〕

大阪商業大学商業史研究所資料目録 第3集〔前編〕

道修町文書目録―近代編〔下巻〕―〔大阪府〕道修町文書保存会〕

〔以下次号〕

# 彙報

○平成八年度史料管理学研修会〔第四二回〕の開催

本年度の長期研修課程は、前期が平成八年七月一日～七月二十六日、後期が平成八年九月二日～九月二十七日の日程で東京会場〔国文学研究資料館〕にて開催された。短期研修課程は、平成八年一月一日～一月三二日の日程で、長野会場〔ホテル信濃路〕において開催される〔受講者は決定済み〕。なお、カリキュラムは別掲の通り。

## 史料館の

### 学術雑誌が閲覧できます！

史料館では、史料目録、地方史誌について、所蔵している各種の学術雑誌を公開しています。閲覧が出来るものは、『地方史研究』など約1200タイトルです。学会誌はもちろんのこと、自治体史編纂にかかわる研究誌も多く取り揃えています。どうぞご利用下さい。著作権法に抵触しない限り複写することもできます。雑誌の公開についてのお問い合わせは、情報閲覧室〔内線511〕へ。

○国文学研究資料館春季特別展示

平成八年五月一三日～五月二十四日の日程で、「近世文字社会のひろがり」とのテーマで行った。詳細は別掲の記事の通りである。

○国文学研究資料館春季公開講演会

特別展示のテーマで五月一七日に開催された。演題と講師は以下の通り。

近世私文書の世界 当館館長 森 安彦

近世の農民日記 当館教授 高木俊輔

近世村落文化の構造―文字文化と非文字文化―

国立歴史民俗博物館教授 高橋 敏

○大学院原典購読セミナー

本年八月二六日～三〇日の日程で開催され、当館教授高木俊輔が「夜明け前」の世界―大黒屋日記を読む―のテーマで三コマを担当した。

○評議員会と運営協議会の開催

本年七月一六日に評議員会が、六月二六日に運営協議員会がそれぞれ開催され、管理運営について評議ないし協議された。

○評議員の退任と新任〔敬称略〕

退任〔本年六月三〇日〕

小林清治 (東北学院大学教授)

秀村選三 (久留米大学教授)

小玉正任 (国立公文書館元館長)

新任 (本年七月一日)

朝尾直弘 (京都橘女子大学教授)

阿部謹也 (一橋大学長)

佐々木高明 (国立民族学博物館長)

田中 彰 (札幌学院大学教授)

○運営協議員の退任と新任 (敬称略)

退任 (本年七月三一日)

朝尾直弘 (同前)

新任 (本年八月一日)

藤井讓治 (京都大学教授)

○特定研究経費の交付

「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」(代表森安彦)に五年計画の一年目として七四八万円が交付された。

○文部省科学研究費補助金の交付

・基盤研究A試験「歴史史料の材質劣化評価への化学発光の応用研究」(代表丑木幸男)に三年計画の一年目として九五〇万円が交付された。

・基盤研究A総合「幕藩領主文書と村方・町方文書群の発生・展開並びに伝存に関する史料学的研究」(代表森安彦)に三年計画の二年目として一五〇万円が交付された。

・研究成果公開促進費「史料所在データベース」(代表森安彦)に一四〇八万円

が交付された。

・国際学術研究「在英日本史料の所在と現状に関する調査」(代表森安彦)に二年計画の二年目として六九〇万円が交付された。

・重点領域研究「諸藩江戸屋敷のネットワーク―大名家文書複合化の研究」(竹井協三・大友一雄)に七〇万円が交付された。

・基盤研究C「幕末維新期における農民日記に関する研究」(代表高木俊輔)に二年計画の一年目として一三〇万円が交付された。

・基盤研究C「史料に用いられた紙資料群の科学的類別に関する研究」(代表青木睦)に三年計画の一年目として一五〇万円が交付された。

・基盤研究C「北海道・沖縄県その他島嶼における特別町村制及びその先行形態の自治体制度史の研究」(代表鈴江英一)に二年計画の二年目として六〇万円が交付された。

・特別研究員奨励費「近世・近代期の地域社会と村落行政―文書管理史の視点から―」(代表富善一敏)に八〇万円が交付された。

○館内研究会

「二五一回」本年五月三三日

英国図書館所蔵日本語史料の調査方法について 森本祥子

### お知らせ

今年の七月一日より、閲覧室の開室日時が変更になりました。

1、開室時間を延長しました。

午前九時より午後五時までに変更

(従来は、午前九時三〇分より午後五時まで)

2、月末が休室日になりました。

(月末が土・日・振替休日になる場合は直前の金曜日、さらにその金曜日が祝日になる場合は直前の木曜日)  
\*月末に来館される場合は、お気をつけください。

「二五二回」本年九月三三日

山梨県下役場文書目録の作成について

鈴江英一

「二五三回」本年九月一三日

特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」の進め方について 各班責任者

「二五四回」本年九月一九日

「公文書館における専門職員の養成機関の整備等に関する研究会報告」の検討 丑木幸男

○人事異動

採用 (本年四月一日付け)

史料管理研究室

客員教授 (日本女子大学) 永村 眞

併任助教授 (滋賀大学) 蔵持重裕

COE非常勤研究員 (再任) 講師 森本祥子

### 史料館報 第六五号

平成八年 (一九九六) 九月三十日

編集兼 国文学研究資料館

発行者 史料館

〒二四 東京都品川区豊町一ノ六ノ〇

電話〇三三三八九五七三(代)

FAX〇三三三八七五(四五五六)

〒二二 東京都台東区寿三丁目一五

有限会社 スミダ

電話〇三(三三四)二七三三三